

自分を律する心

みんながやっているから、やってもいい？
みんなはやっていないけれど、やるべきことがある。
自分で自分を律することはモラルの原点です。



みんながやっている ことだから？

ある日曜日の午後のことです。郊外の
ショッピングセンターの周りは、駐車場
へ入る車の列で大渋滞。それに加えて、
道の両側には、違法駐車車がギッシリ
並んで、道路はますます通りにくくなっ
ています。

「まったく迷惑な駐車よね」

後ろの座席に男の子を乗せて、ショッ
ピングセンターの駐車場に入るため渋滞
の列で順番を待っているA子さんは、な
かなか進まない車の列にイライラして、
つい文句が出ます。

そのとき、タイミングよく、すぐ左前

の道路脇
に駐車し
ていた車

が出ようとしているのに気がつきまし
た。一瞬ののち、A子さんはウインカー
を出して、その場所に車をとめようとし
ます。

「お母さん、そこにとめていいの？」

後ろの座席から問いかける男の子に、
「いいの、いいの、みんながやっている
ことだから」

それを聞いて男の子がポツリ。

「ほんとにいいの……？」



大人の責任は大きい

子どもたちは、身近な大人の話や行為をよく見聞きしています。またテレビなどを通して、社会のいろいろな不正行為を知らされています。いやがおうでも大人社会の汚い部分が見えてくるのです。それは子どもたちにも必ず悪影響を及ぼします。

“大人の社会は汚い”

“正直者は馬鹿を見るだけ”

だ
“このような考え方が、子どもたちの中に植え付けられてしまったら、子どもたちはいつそう大人を信用しなくなってしまうます。

もちろん大部分の大人たちは誠実に働いているのですが、社会全体のモラルの水準が低下してきていることは否定できません。日常、見聞きする出来事が積み重なり、大人に対する信頼感を失った子どもたちが成長していった社会はどうなってしまうのでしょうか。大人の責任は大きいといわざるをえません。

ここで、ちよつと考えてみましょう。社会のモラルの低下を嘆く人は多いのですが、一人ひとりはそのような風潮と無関係なのでしょうか。気づかぬうちに私たちもその原因になっていることはないでしょうか。

こんな時代だからこそ、私たち一人ひとりが、もう一度、モラルの原点を見直す必要があるのではないのでしょうか。

小さなゴミが 大きなゴミ山に

次のような話があります。

使われなくなつて放置されたビルの窓が割れ、そのままにしておくと、その地域で犯罪が増加するということです。どうしてこのようなことが起こるのでしょうか。

窓が一枚割られていると、他の窓を割ることに抵抗がなくなり、他の窓を

割る人が出てきます。そのまま窓ガラスが補修されないと、このビルは誰からも管理されていないというサインになつて、自然とそこに非行少年たちが集まり、犯罪の温床となつていくというもの

です。

これは社会学では「破れ窓理論」と呼ばれており、犯罪防止のためには、最初の小さなきつかけをつくらないことが大切であるとされています。





同じような状況は、私たちの身の回りにもよく見かけられます。きれいに整備された街路がいろにゴミを捨てることは、心理的な抵抗があつて、普通の感覚の持ち主にはできないことでしょう。しかし、少

しゴミが目につくようになるとどうでしょうか。

おそらくはそれを見て何気なしなげにゴミを捨ててしまう人が増えてくるでしょう。こうして少しずつゴミは増えていきます。ゴミがたまればたまるほど、心理的抵抗は弱まり、加速度的にゴミの量は増えていき、その結果はゴミの山ということになります。

最初はちよつとしたきっかけだったとしても、それが積み重なることによつて、大きな問題になってしまいます。現在のモラルの低下にも同じことが言えるのではないのでしょうか。みんなやっていることだから、自分一人くらいだじょうぶだろう」という気持ちだが、大きな問題を生むことになるのです。

周りに流される

「みんながやっていることだから」

このような言葉を口にす
る背後には、自分のやって
いることに対する後ろめた
さがどこかにあるよう
です。「悪いのは自分一人
ではなく、周りも同じなの
だ」ということを、自分へ
の言い訳にしてしまっ
てるのではないですか。

「ちょっとおかしいのでは」と思っ
てることでも、「みんなやっていること
から」とか、「今までやってきたこと
から」と言われてしまうと、何となく
それに従ってしまうことがあります。

どこかで少しは良心の痛みを感じて
いるはずなのに、自分ではいけないことだ
と分かっているはずなのに、周りに引き
ずられてしまうという弱さを、私たちは
持っています。同じ環境の中にいること
によって、だんだんと感覚が麻痺してし
まうのです。



芯の通った生き方

教育心理学者の伊藤隆二氏は、『育ち合うところ』（モラロジー研究所刊）の中で、ある少年の話を紹介しています。



少年は、父親とともに旅行に出ました。行きの普通電車の車内は掃除が行き届いていないために汚れていました。乗客もゴミを座席の下に捨てていたために、その少年もハナをかんだ紙を、みんながするように座席の下に捨てました。父親は黙って見ていました。

帰りは急行列車に乗りました。この列車は掃除が行き届いており、ゴミを床に捨てる人はいませんでした。少年も自分がハナをかんだ紙を上着のポケットに入れました。

このとき、それを見ていた父親が初め

てこの少年の不正をただしました。

「おまえは行きの汚い列車の中ではハナ紙を捨て、帰りのきれいな列車の中では捨てなかった。おまえは自分の行為を場所によって左右されている。そのようなことでは、芯のしつかりした人物にはなれん。どんな場合でも自分が正しいと思

うことはする、正しくないときはしないという芯のしつかりした人物になるように心がけなさい」

こう言われて、この少年は行きの列車でハナ紙を座席の下に捨てたことを後悔し、同時に環境に支配されない人物にならなければ、と思ったということです。

自分の良心に照らして

この少年は父親から、自分を自分で律していくことの大切さを教えられました。

最近、「個人の自立」ということがよく言われるようになってきました。これ

は単に自分の思うとおりに生きるということではなく、自分の中にきちんとした基準を持つてそれに従って自分を律して生きるということです。

「自律」は「自立」につながります。自



分を自分で律していくことがモラルの原点ではないでしょうか。

自分のとるべき行動について迷いが生じたときには、少し立ち止まって、自分の心に問いかけてみてはどうでしょうか。

“自分の行為を場所によって左右されていないだろうか”

“どのような場合でも自分が正しいと思うことはする、正しくないときははしないという生き方をしているだろうか”

社会の一員として、自分の良心に照らして恥はずかしくないかどうかを、あらためて心の中でよく考えてみる事が大切でしょう。それが道徳の実行の第一歩になるのではないでしょうか。

「ならぬことはならぬ」

私たちは大人の責任として、次代を担う子どもたちに、自分を律することのできるきちんとした基準を、どのようにして示していくことができるのでしょうか。

自分の子どもを振り返ってみると、親や近所の人にほめられたり、叱られたりした思い出があるでしょう。子どもは家庭や社会でのしつけを通じて、「やってはいけないこと」「やらなければならないこと」を学びます。

つまり、しつけは、親や周囲の人々によつて善悪の基準を教えられる「他律」

といえます。それによつて、子どもたちは社会のルールを身につけ、自分を律することを覚えていきます。

江戸時代の会津藩（現在の福島県）

は、子弟の教育に力を入れたことで知られています。藩校「日新館」に入学する前の六歳から九歳の子どもたちは、同じ町内の子どもどうしで「仕」と呼ばれる十人ぐらいの集団をつくっていました。仕には「仕の掟」として、

「うそをいつてはならない」

「卑怯なふるまいをしてはならない」

「弱いものをいじめてはならない」

などの約束ごとが決められ、子どもたちはこれを守るように努めました。

「仕の掟」の最後は、「ならぬことはな

※藩校—江戸時代、藩主がその藩の子弟を教育するために設けた学校

らぬものです」という言葉で締めくくられています。

「ならぬことはならぬ」

短い言葉ですが、現代の私たちに対しても非常に強く響いてくる言葉です。

もちろん、「仕の掟」の内容の中には、**武家社会の道徳を反映した**ものですから、**現在にはそぐわないもの**もあります。

しかし、しつけとしての「他律」を必要とする年齢の子どもたちに対して、自分を律していくための善悪の基準をきちんと示すというあり方は、現代のように**社会生活の基本的なマナーやモラルを見失**ってきている時代に生きる私たちに**とって、あらためて見直すべきもの**があるのではないのでしょうか。



基本的なモラルは 家庭から

私たちは、今日のような国際社会、情報社会といわれる現代に生きていくと、古くから言い伝えられてきた教訓や逸話などは通用しないという思い込みがあります。

しかし、教訓や逸話には、いつの時代にも変わらない大切な道徳性が含まれていることを知っておく必要があるのでしよう。

たとえば「正直は一生の宝」。これは、正直は一生通じて心がけるものであつて、誰にでも誇れる財産という意味です。「正直の頭に神宿る」とは、正直な人には必ずいつかは神の助けがあるこ



とをいいます。

子どもが約束をするときには「嘘ついたら針千本」と言ったり、「嘘つきは泥棒の始まり」と言つて、嘘をつくことを戒めてきました。

子どもどうしによるけんかの際にも、弱いものはいじめてはいけないとか、大勢で一人を相手にするのは卑怯であるな

どと教えてきました。

戦国時代、越後（今の新潟県）の上杉謙信と甲斐（今の山梨県）の武田信玄との戦にまつわる次のような逸話があります。

あるとき、甲斐の国は周囲の敵によって、塩の運搬路を絶たれてしまいました



た。塩は人の生命を維持するために欠かせないものです。これに対して、当時、信玄との戦の最中だった謙信は、塩を届けさせたのです。

塩が絶たれて苦しむ敵のようすを知らせにきた家来が、

「いい気味ではありませんか」と言っただのに対して、謙信は、

「できるかぎり塩を集めて、甲斐に送り届けてやるのがよからう」

と言っただけを立ったといえます。

私たちの先人は、この「敵に塩を送る」という話によって、たとえ敵国ではあっても領民まで巻き添えにして苦しめてはいけないこと、また、敵対している相手にも思いやりをかけ、正々堂々と向き合うことの大切さを伝えてきたのです。

ルが社会を変える

「卑怯なふるまいをしてはならない」

「弱いものをいじめてはならない」

「他人に迷惑をかけてはならない」

こうした社会の基本的なモラルは、家庭や身近な社会の中で、分かりやすい言葉や物語、逸話などを通して伝えられてきました。そのようなしつけを受け、実際にさまざまな経験を積むことによって、子どもは善悪の基準を自分の心の中につくり上げ、自分を律していくことができたのです。

自分を律するというと、私たちは自分の意欲を抑え込むとか、自分らしさがなくなると受け取りがちです。しかし、決してそうではありません。

易きにつきやすく、周りの情勢に流



